

## 「五ヶ瀬町の未来を考える一票」

津留 亮大

五ヶ瀬町は今、人口が減少し、高齢化が進んでいます。実際に町の中を歩いていると、高齢の方々が多く、反対に若い世代は少ないと感じることがよくあります。これから先、この状況がどうなっていくのか、不安を感じる瞬間も増えてきました。自分自身がこの町でどう生きていくのか、また、同世代の人たちがどれくらい残るのか…そのことについて、最近よく考えるようになりました。

私が初めて選挙に行ったのは18歳の時でした。当時、私はまだ高校生で、場所は延岡市でした。高校生活もあと少しという時期で、なんだか「大人になる」という実感が湧き始めた頃でした。

学校が終わって、制服のまま投票所に向かいました。正直、その時は政治のことについてほとんど理解していませんでしたし、どんなことを基準に投票すべきかもよくわからないままでした。

投票所に入ると、そこはすごく静かで、独特な雰囲気の中、投票用紙を前にして、正直「これで本当にいいのかな？」と迷っていたのを今でも鮮明に覚えています。

自分の手で選ぶべき人がわからない、決め手に欠ける感じで、名前を書く瞬間、すごく緊張しました。周りの大人たちは真剣に投票をしていて、私はその場にいることがちょっと場違いな気さえしていました。

それでも、何とか名前を書いて投票を終え、投票所を出たときには、心の中で少しだけ大きな変化を感じました。「自分も社会の一員になったんだな」と、急に実感が湧いてきました。

選挙のことを完全に理解していたわけではありませんが、その時の感覚は、今でも忘れられません。それまで「選挙」と聞くと、どこか遠い世界の話だと思っていたのが、自分がその一部になったんだという実感がすごく新鮮で、ちょっと誇らしい気持ちもありました。

たとえ一票が小さなものだとしても、その一票が何かしら未来に影響を与えるんだということを、漠然とですが感じた瞬間でした。

それから、五ヶ瀬町に引っ越してからも、選挙にはしっかり参加するようになりました。

五ヶ瀬町で投票した時は、延岡市での初めての投票よりも、さらに強く「この一票が、町の未来に直接つながっているんだ」と実感しました。町が小さいからこそ、一人ひとりの選択が町の未来を形作る力を持っているということ、より感じたのだと思います。

特に、五ヶ瀬町のように高齢化が進んでいる町では、若い世代の声がどうしても少なくなりがちです。実際、同世代の友達と選挙の話をする機会も少ないですし、「難しそう」「よく分からない」という理由で選挙から遠ざかっている人も多いと思います。でも、若い世代が選挙に行かなくなったら、この町の将来を考える声がますます少なくなってしまうのではないかと私は思います。

選挙は特別な人だけのものではありません。うまく言葉にできなくても、考えがまとまっていなくても、誰でも参加できるものだとは私は考えています。完璧に理解していなくても、一票を投じることに意味があると私は感じています。それがたとえ小さな一歩であっても、自分の意志を示すことができる、それ自体に価値があるからです。

これからも私は五ヶ瀬町のことをしっかり考えながら、選挙に向き合っていきたいと思っています。自分の意見を持って、時には悩みながら、それでも自分の一票を大切にしていきたい。その気持ちを忘れずに、町の未来に向けて考え続けていきます。

ご清聴ありがとうございました。